学級経営・実践研究法キャリアアップフィールド
コース名：問題解決型の道徳教育の理論と実際

学校教育専修　　柳　沼　良　太

1. はじめに

本コースは，「問題解決型の道徳教育の理論と実際」と題し，道徳授業の革新と教員の指導力の向上を目指して研修を行った。わが国で道徳授業と言えば一般的に，道徳資料を読んで子どもに登場人物の心情を把握させ道徳的価値を内面化させる型の道徳授業が主流であるが，本コースでは子どもが学校生活で直面する道徳的問題を自ら考え判断する問題解決型の道徳授業を紹介し，実際に指導案を作成し実践することを計画した。

本コースの内容を紹介するシラバスには次のように記した。「学校生活における道徳的問題（いじめ，喧嘩，非行，恋愛など）を取り上げ，子どもたちが自ら課題を発見し思考し解決する学習方法を検討する。多様なカウンセリング・スキルを取り入れながら，子どもたちの思考と感情と行動にホリスティックに働きかける新しい道徳教育のあり方を探求し，実際に道徳授業の立案を行う」。こうした研修内容は，平成16年度の大学院で開講した道徳教育研究特論と教育臨床研究の講義内容を融合したものであり，また現場の教師研修という趣旨に合わせて教育理論よりも教育実践を重視した内容に修正したものである。

上述のシラバスに賛同した研修生８名が本コースに参加した。その内訳は，小学校教諭が７名，中学校教諭が１名であり，特に小学校で学級担任をする女性教諭の多いのが特徴的であった。

2. 実施状況

研修生が事前に提出した「自己の構想」から判断すると，研修生８名のねらいは多種多様で，初歩的な道徳指導法を学ぶことから大学院修了後の専門的な道徳教育を研究することまで多岐にわたっていた。ただ，その中でも従来の道徳授業では目の前にいる子どもたちの日常生活に根ざした道徳的実践を支援できないと思い悩んでいる点では共通しており，問題解決型の道徳教育に少なからぬ期待を寄せていた。

(1) 1回目の研修日

研修初日の８月２日は，午前中の部でまず各研修生が自己紹介を兼ねて，これまで行ってきた道徳授業について語り合った。もともと研修生は12年という教歴をもつため，いわゆる従来の心情主義的な道徳授業は十分習得しており，さらにモラルジレンマやエンカウンターや「心のノート」を活用して高度な道徳授業を実践している方もいた。ただ，時代と共に変わりゆく子どもたちの姿に戸惑い，これまでの道徳授業では十分に対応できないという不満を吐露されていた。こうした道徳教育に関する本音を語り合う中で，お互いに仲間意識をもち信頼関係を築くと共に，新しい道徳教育のあり方を探究していった。

午後の部では，問題解決型の道徳授業の理論とスキルについて講義し，その実践例を具体的に紹介した。こうした初日の講義をふまえて，研修生は自らの目指す問題解決型の道徳授業として以下のような構想を発表した。N教諭は，児童が自分を深く見つめるための学びを支援する道徳授業を構想した。W教諭は，児童の向社会的行動を促す道徳授業を構想した。ＨＹ教諭は，児童が友達一人ひとりを大切にして,心のつながりを育むような学級づくりを構想した。ＨＫ教諭は，児童が自らの問題を深く考え判断できるようにする道徳授業を構想した。ＨＲ教諭は，児童が男女仲良く心豊かに行動できるようにする道徳授業を構想した。Ｔ教諭は，児童が自らよりよい生き方を求めて実践できるように支援する道徳授業を構想した。ＨＳ教諭は，児童が自分の思いを伸び伸びと表現できるような道徳授業を構想した。Ｇ教諭は，中学生が仲間との関わりの中で自己を見つめ直せるような道徳授業を構想した。こうした研修生の構想をもとに各自が自宅研修で問題解決型の道徳授業の指導案を作成するようにと課題を出して初日を終えた。

(2) 自宅研修期間

この後，研修生は一月間近くの期間で道徳授業の指導案を作成した。問題解決型の道徳授業の指導案を作成する上で不明な点がある場合は，随時Ｅメールで個人的に質問を受け返答をした。3週目には研修生の構想した指導案を研究室で個人指導した。

問題解決型の道徳授業の作り方については初日に詳しく説明したつもりだったが，8名中2名はあまり理解できていなかったようで，何度も質問のメールが届いた。また，従来の副読本をそのまま写して指導案をメールで送ってきた方もいたため，最初から説明し直す必要もあった。その他の6名は特に支障なく問題解決型の道徳授業の指導案を適切に作成することができた。その中の2名（W教諭とＨＹ教諭）は高度なアンケート用紙と自作資料とワークシートを独自に作成し，大学院生レベルの指導案を完成させた。

(3) 2回目の研修日

研修2日目の8月30日は，それぞれが作成した指導案を発表し合い，相互に批評や吟味をした。自宅研修期間中にもメールや面接で個人指導を行ったため，この日は既に8名の研修生がそれぞれ個性豊かで創造的な道徳授業指導案を完成させ発表することができた。特にカウンセリング・スキルを問題解決に活用した斬新な道徳授業も多く見受けられた。道徳資料は，従来の道徳の副読本や読み物資料を部分修正したものから，新聞や雑誌や小説から切り取って独自に作成したもの，さらには自作資料まで多様であった。

以下に，この研修日に発表された内容を紹介しておきたい。N教諭は資料「かぼちゃのつる」と自作資料を用いて，児童が他人に迷惑をかけず自らの安全を確認しながら伸び伸びと行動するための道徳授業案を発表した。W教諭は，道徳性発達理論に基づく独自のアンケート調査を作成し，資料「みみずくとおつきさま」と自作資料を組み合わせたシミュレーション型の道徳授業案を発表した。ＨＹ教諭は，児童が学級の班づくりを通して互いの個性を認めながら協調し合えるようにする道徳授業案を発表した。ＨＫ教諭は，資料「にわのことり」とイラスト付ワークシートを用いて，児童が自ら考え判断する能力を育むことのできる道徳授業案を発表した。ＨＲ教諭は，資料「言葉の贈り物」を用いて児童が心豊かに男女仲良く協力し合うクラスにするための道徳授業案を発表した。Ｔ教諭は，新聞記事から黒柳徹子の「父の言葉」を引用して，児童が自らよりよい生き方を求めて道徳的実践できるようにする道徳授業案を発表した。ＨＳ教諭は，資料

「絵はがきと切手」を用いて葛藤場面を提示して，児童が自らの価値を明確化し問題解決できる力を育むための道徳授業案を発表した。G教諭は，落合恵子の随筆「同じということ，違うということ」を取り上げ，中学生が仲間との関わりの中で自己を見つめ弱さに立ち向かうための道徳授業案を発表した。

どの研究報告も研修生一人ひとりの個性と独創性を存分に生かした指導案であり，十分な時間をかけて練り上げられた力作揃いであった。

(4) レポートの提出

最後に，2回目の研修日で発表した指導案を実際に道徳授業で行い自己評価して，9月中にレポートを提出するよう指示した。研修生は自ら構想した独創的な道徳授業を積極的に実施し，その効果を検証して報告してくれた。

その中には,同僚教師や校長と協力して研究授業を開催し検討会の結果までを報告した方から，授業風景をビデオや写真で撮って記録して報告した方，子どもたちが記入したアンケートやワークシートを分析して報告した方まで様々であった。これらのレポートにはすべて教員側からの評価とコメントを明記してメールで返信した。このレポートに基づく教育実践研究の成果の一部は，岐阜大学教育学部の研究報告書『教育実践研究』(第7巻) に掲載した。

2. 今後の課題

今回，12年目研修を初めて担当させていただいたが，事前の準備不足もあっていくつかの課題を残すことになった。以下にその課題を2点だけ挙げておきたい。

まず，短期間の研修であったため，講義が不十分であった点である。初日に問題解決型の道徳授業について全体指導を行ったのだが，研修生の中にはその内容を十分理解できないまま指導案の作成に取り掛かった者がいた。そのため,一部の研修生は道徳教育の基礎認識が不足しており，何度も初歩的な指導をメールでやり取りしなければならなかった。そこで12年目研修は，全体指導をする日，それをもとに個別指導をする日，そしてお互いの研究成果を発表し合う日で最低3日間は必要ではないかと思われた。

次に，事前に研修用の教材を作成しなければならない点である。研修は初日の全体指導だけではとうてい間に合わず，関連資料を配布して自宅研修に役立ててもらう必要がある。今回の資料作成の経費はすべて学部の研究費を利用したが，研修用の資料を独自に作成するためには，別途に経費を確保しておく必要があると思われた。

3. 今後の展望

12年目研修は，現場の教師一人ひとりが教育実践力を伸ばすと共に研究力を身につける上で絶好の機会になると思われる。研修の当初は，現場体験に固執していた教師も，様々な教育実践報告や教育理論を理解するにつれて熱心に道徳教育を研究するようになり，最後には独創的な指導案を報告してくれた。また，現場の道徳授業ではこれまであまり用いられることのなかったワークシートやアンケートを今回の研修で作成することで実証的な道徳授業の方法を理解するようになった。研修を受けた教師は大学での自由な研究の機会を与えられることで，本来の独創性と自律性を取り戻し，独自の授業を構想し実践した達成感と充実感を感じたようであった。研修が終

わってからも，自主的に新たな道徳授業を構想し実践したという報告を寄せてくれたり，道徳アンケートや子どもの発言を分析するために研究室を訪れてきたりする方が何人かいた。

また，この12年目研修は大学教員の現場意識を高めることにも繋がると思われる。ともすると大学教員は自らの専門的な理論研究に専念しがちであるが，現場の教師と密接に関わることで意識を新たにし，自らの理論研究を実践に役立てて教育現場に貢献することができる。今後，この12年目研修が現場教師と大学教員との架け橋となり，互いを成長させる貴重な場として発展することを期待したい。